

# K君の暮らす村 -- ベトナム北部ハーナム省（フォト・エッセイ）

著者	寺本 実
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	153
ページ	40-43
発行年	2008-06
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00004993">http://hdl.handle.net/2344/00004993</a>

■ フォト・エッセイ ■

# K君の暮らす村

## —— ベトナム北部ハーナム省 ——

写真・文  
寺本 実  
Minoru Teramoto



D村の田園

K君が暮らすのは首都ハノイからほど近いハーナム省ズイティエン県D社（以下、村と呼称）。「省」、「県」、「社」はそれぞれ日本の県、郡、村に相当する。同省の面積は八五九・七平方キロメートル、人口は八二万六六〇〇人（二〇〇六年暫定値）でベトナム北部红河デルタに位置する。同デルタ内にある二中央直轄市九省中、面積は下から二番目、人口は最も少ない。

D村はベトナムの北部と南部をつなぐ国道一A号線に貫かれ、人口は八〇〇〇人に満たない。一A号線の喧騒と裏腹に少し脇にそれると田園が広がる。そして、亭（ディン）、カトリック教会、仏教寺院がそれぞれの個性を保ちつつ空間を共有している。

市場には食料品から衣料品までなんでもそろろう。目に付いた食品の価格を交渉なしで聞いたところ、一キロ当たりの価格は米四〇〇〇ドン、もち米七五〇〇ドン、皮厚大みかん六〇〇〇ドン、マンゴー（中部沿海地方ニャチャン産）一万二〇〇〇ドン：といった答えが返ってきた。隣の街で買った皮厚大みかんは一キロ八〇〇〇ドンだったから、この方が物価は安いのかもしれない。訪問当時の相場は一ドル約一万六〇〇〇ドンである。

二〇〇六年一〇月末に出会った時、K君は一九歳。ベトナムでは一八歳で選挙権が付与され、二一歳になると国会代表選挙、人民評議会代表（ベトナムの地方議会）選挙に立候補することができる。そういう年



国道1A号線。交通量が非常に多い



市場の一風景



「何しに来たの？」子供は元気だ



頃だった。

ある調査で各家庭を回っていたのだが、朝一番に訪問した家で在宅の男性（K君の父親）に話をうかがっていたところ、K君が入ってきた。先ほど小道脇の雑貨屋前に立っていた、青いシャツと半ズボンを身につけた青年がK君だったのだ。K君は四人兄弟の三番目で両親と暮らす。同家庭は貧困家庭に指定されていた。二〇〇六～二〇一〇年の農村部における貧困ラインは一人当たり月収二〇万ドンである。

その日の午前中、K君はついてきてくれた。K君が道をゆくと、皆が彼の名前を呼ぶ。

K君と共に訪れた二〇代初めの女性宅ではご本人はすでに外出していた。母親に話をうかがうと、同女性はよく病気になるという。

二つめのお宅ではご本人にお会いできた。父親が一九七二～一九八〇年にラオスのホーチミン・ルートで軍務に就いていて、直接枯葉剤に被災した。三〇代前半で無職、穏やかな男性は父親を源として枯葉剤に被災した。幼い子どもが二人いる。家の壁にはキリスト像が形作られていた。

三つめのお宅で話をうかがった二〇代前半の女性は牛の世話ではじめ家を空けていたが、少し待つと戻ってきた。女性の祖父は何もできないと言っていたが、ほかにも家事、刺繍と多忙だ。手術した左足が時々痛むという。帰り際に彼女製作の刺繍を





籐細工作りに取り組んでいる女性（右端）。母親（中央）らと



市場近くを通りがかった老人



小道

二万一〇〇〇ドンで購入した。  
最後の訪問先となったお宅では一〇代後半の女性がベッドで休んでいた。母親と祖母が付き添っている。母親が農業で生活を支えているという。父親は事情があつて別の村で暮らす。一部屋だけの平屋の家で、カバーのとれた扇風機が回り続けていた。各家庭で話をうかがっている間、K君は椅子、あるいはベッドに腰掛け、じっと黙っていた。  
二日後、K君にまた小道で出会った。「お父さんは？」と聞くと「家でぶらぶらしている」。この日も午前中の調査にK君は同行してくれることになった。  
はじめに訪ねたのは三人の子どもがいる若い夫婦のお宅だった。就学前の末の息子さんが口唇裂で「オペレーション・スマイル」の手術を受けることになっている。父親がハノイに直接行つて、手続をしてきた。交通費が支給され、手術は無料とのことだった。  
二番目に訪ねたお宅はカソリック教会堂前の池の辺にあった。内的障害を抱える一〇代の少女は治療のため一〇日前におぼのいるハノイに出かけており、母親に話をうかがうことになった。訪問後すぐ席を外され、待っていると温かい白湯を持ってきた。下さった。父親は農業に従事しながら、農閑期に中国国境沿いランソン省で小売業を営んでいる。

三番目に訪ねたお宅は三〇代前半の女性





2人は戦友



闘鶏を楽しむ



産声を上げつつある障害者活動のリーダー(中央)とご家族。同男性は「漢方」の専門家

宅であった。ご両親と妹の四人で暮らしているが、二カ月前にハノイに。同女性は今来手足に障害を持ち、また、心臓の手術を受けている。二日に一回隣省ハートイ省の病院で診療を受ける必要があるという。

K君は先日と同様、訪問先の椅子あるいはベッドに腰掛けてじっと黙っていた。

昼は卵の生産・売買を生業としている民家(三番目に訪問したお宅の親類宅)で過ごしになった。ご夫妻とおじいさんが家にいた。ご夫妻は大皿一杯に盛った「ゆで玉子」(若干雛に成長しなかったもの)や魚料理などでもてなしてくれた。

食後少し休みをとり、K君の家の側まで一緒に行った。

午後の調査を終えて宿に戻る途中、初めて出会った小道の脇にK君が立っていた。改めて御礼を言い笑顔で別れた。

◇ ◇ ◇

二〇〇七年一〇月、調査で中部北方地域に位置するタインホア省に向かった。ハノイからタインホア省に行くには国道一A号線を用いる。行きは車を借りたので前年の調査時にお世話になったハナム省の人たちに少しだけ挨拶できた。帰路は通りがかりのバスを拾いハノイへ。やがてハナム省に入り、車窓から外を注視する。

K君の暮らす村をバスは通りすぎた。

(てらもと みのもる／アジア経済研究所地域研究センター)